

千葉市感染症発生動向調査情報

2023年 第10週 (3/6-3/12) の発生は？

1 定点報告対象疾患(五類感染症)

報告のあった定点数		10週	9週	8週	7週
小児科		18	18	18	18
眼科		5	5	5	5
インフルエンザ*		28	28	28	28
基幹定点		1	1	1	1

上段:患者数
下段:定点当たりの患者数

「定点当たりの患者数」とは
報告患者数/報告定点数

定点	感染症名	千葉市						千葉県
		注意報	3/6-3/12	2/27-3/5	2/20-2/26	2/13-2/19	2/27-3/5	
			10週	9週	8週	7週	9週	
小児科	RSウイルス感染症		0	0	0	0	0	0
	咽頭結膜熱		1	0	0	0	0	6
	A群溶血性レンサ球菌咽頭炎		9	8	6	7	75	
	感染性胃腸炎	○	98	84	97	136	594	
	水痘		1	1	2	0	4	
	手足口病		1	0	0	0	1	
	伝染性紅斑		0	0	0	0	0	
	突発性発しん		3	4	2	3	17	
	ヘルパンギーナ		0	0	0	0	2	
	流行性耳下腺炎		0	0	0	1	6	
インフル	インフルエンザ (高病原性鳥インフルエンザを除く)	↓	159	166	192	218	1,772	
眼科	急性出血性結膜炎		0	0	0	0	0	
	流行性角結膜炎		0	1	0	0	11	
基幹定点	クラミジア肺炎 (オウム病を除く)		0	0	0	0	0	
	細菌性髄膜炎 (髄膜炎菌性髄膜炎を除く)		0	0	0	0	0	
	マイコプラズマ肺炎		0	0	0	0	0	
	無菌性髄膜炎		0	0	0	0	1	
	感染性胃腸炎 (ロタウイルスに限る)		0	0	0	0	0	

★★:流行中 ★:やや流行中 ◎:増加 ○:やや増加 →:変化なし ↓:やや減少 ↓↓:減少

2 全数報告対象疾患: 72 例 ※ 新型コロナウイルス感染症67例は数のみ

病名	性	年齢層	診断(検査)方法	病名	性	年齢層	診断(検査)方法
結核	男性	60歳代	病原体等の検出	梅毒	男性	30歳代	血清抗体の検出
	男性	60歳代	IGRA検査		男性	30歳代	
新型コロナウイルス感染症	男女	10歳代-90歳代	病原体遺伝子の検出等		男性	40歳代	

*第10週は、結核2例(21)、梅毒3例(15)、新型コロナウイルス感染症67例(5,358)の発生届があった。

※ ()内は2023年の累積件数。但し、累積件数は速報値であり、データが随時訂正されるため変化します。

定点当たり報告数 第10週のコメント

<感染性胃腸炎>

前週からやや増加し5.44となった。過去10年の同時期と比べるとほぼ平均レベル。年齢階級別の報告数は3歳で最多。区別の発生状況は、緑区(8.00)で最多で、同区の4歳で最も多く発生報告があった。

<インフルエンザ>

前週よりやや減少し5.68となった。過去10年の同時期と比べると少なめ。年齢階級別の報告数は10-14歳が最も多く、10歳未満では6歳が最も多かった。区別の発生状況は、緑区(9.60)で最多で、同区の6歳で最も多く発生報告があった。

■ 「過去10年との比較グラフ」及び「区別の発生グラフ」はWebSiteでご覧いただけます。

・ 過去10年との比較グラフ

<https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoeisei/khoken/kkagaku/idsc/documents/graph2022.pdf>

・ 区別の発生グラフ

https://www.city.chiba.jp/hokenfukushi/iryoeisei/khoken/kkagaku/idsc/documents/graph_ward2022.pdf

■ トピック ■

<結核>

3月24日は世界結核デーです。

細菌学者ロベルト・コッホが1882年に結核菌の発見を発表した日にちなみ、結核問題の重要性を警告し、結核対策の強化の必要性を訴えるため、1997年の世界保健総会で制定されました。世界では、2021年に結核に罹患した人は1060万人で、結核のために死亡した人は160万人となっています。

日本では、2021年に新たに結核患者として登録された者の数(新登録結核患者数)は11,519人で、前年より1,220人(9.6%)減少しています。結核罹患率(新登録結核患者数を人口10万対率で表したものは、前年より0.9ポイント減少し、9.2となり、罹患率10.0未満とする結核低まん延の水準を達成しました。しかしながら、今でも年間10,000人以上の新しい患者が発生し、約2,000人が命を落としている日本の主要な感染症となっています。千葉市では、市内医療機関からの届出数が毎年約150例あり、その内、市内在住者は約120例となっています。

2023年第9週時点の全国の届出累積数は1,996例で、過去5年の同時期と比べると最少となっています。都道府県別では、東京都が298例と最も多く、次いで大阪府147例、神奈川県141例、埼玉県115例、千葉県111例となっています。

千葉市では第10週に2例の発生届があり、2023年の届出累積数は21例となり、2021年までの過去5年の同時期(2018年37例、2019年28例、2020年33例、2021年27例、2022年32例)と比べると、最少となっています(図1)。

2018年(167例)から2021年(133例)まで、届出数は減少していましたが、2022年(143例)は増加しました。2022年は、143例の届出中、類型別では、患者が82例(57.3%)、無症状病原体保有者が55例(38.5%)、疑似症患者が0例(0%)、感染症死亡者の死体が5例(3.5%)、感染症死亡疑い者の死体が1例(0.7%)でした(表)。男女別では、男性88例(61.5%)、女性55例(38.5%)と男性が多く、年代別では70歳代が最も多く(29例、20.3%)、次いで50歳代及び80歳代(共に23例、16.1%)の順でした(図2)。

2023年は、第10週までの21例について、男性10例(47.6%)、女性11例(52.4%)で、年代別では70歳代及び80歳代(共に6例、28.6%)が最も多く、類型別では、患者が14例(66.7%)、無症状病原体保有者が7例(33.3%)となっています。

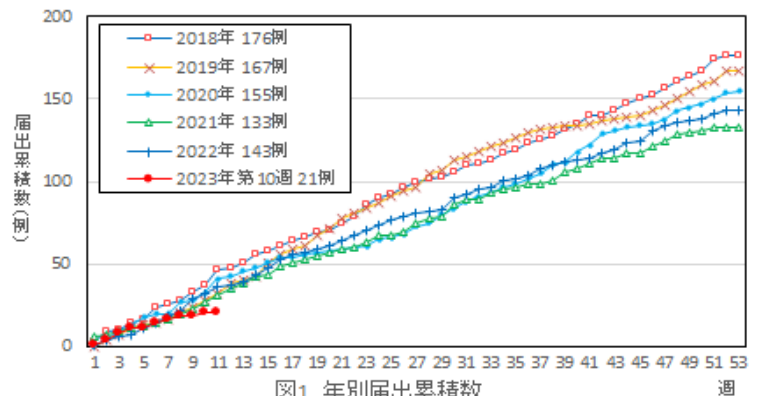


図1 年別届出累積数
(2018年第1週-2023年第10週 n=795)

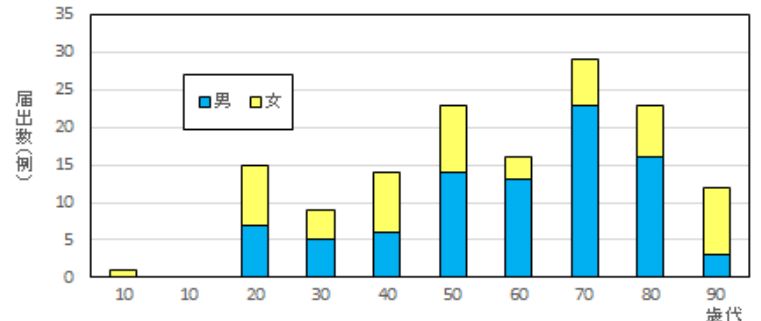


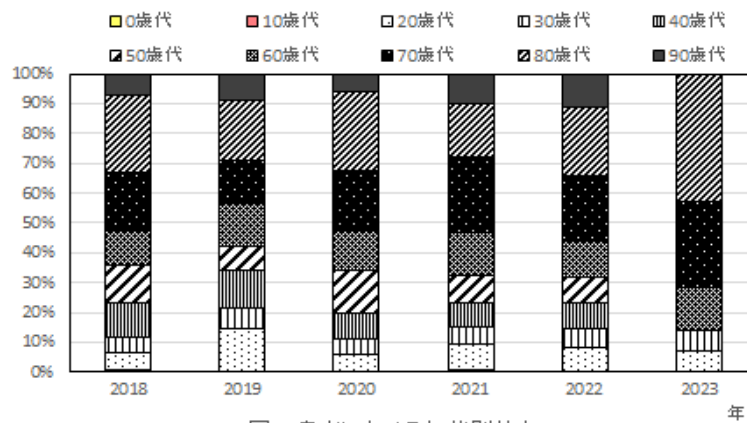
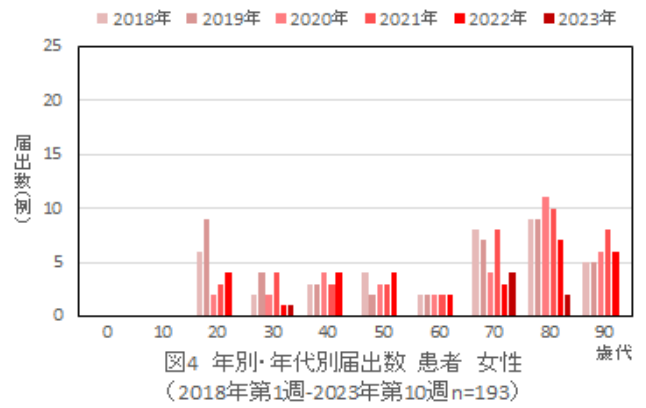
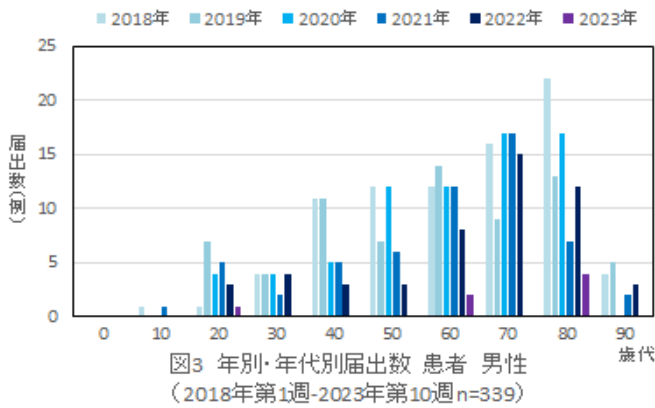
図2 性別・年代別(2022年 n=143)

表 年別・類型別届出数 (2018年第1週-2023年第10週 n=795)

	2018年		2019年		2020年		2021年		2022年		2023年第10週時点		計	
	届出数	割合	届出数	割合	届出数	割合	届出数	割合	届出数	割合	届出数	割合	届出数	割合
患者	122	69.3%	111	66.5%	105	67.7%	98	73.7%	82	57.3%	14	66.7%	532	66.9%
無症状病原体保有者	51	28.9%	54	32.3%	50	32.3%	34	25.6%	55	38.5%	7	33.3%	251	31.5%
疑似症患者	1	0.6%	1	0.6%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	2	0.3%
感染症死亡者の死体	1	0.6%	1	0.6%	0	0%	1	0.7%	5	3.5%	0	0%	8	1.0%
感染症死亡疑い者の死体	1	0.6%	0	0%	0	0%	0	0%	1	0.7%	0	0%	2	0.3%
計	176	100.0%	167	100.0%	155	100.0%	133	100.0%	143	100.0%	21	100.0%	795	100.0%

2018年第1週から2023年第10週までの患者(532例)中、男性は339例(63.7%)、女性は193例(36.3%)であり、年代別届出数は、男性(339例)は80歳代(75例、22.1%)が最多で、次いで70歳代(74例、21.8%)、60歳代(60例、17.7%)であり、女性(193例)は80歳代(48例、24.9%)が最多で、次いで70歳代(34例、17.6%)、90歳代(30例、15.5%)となっています(図3、図4)。

2018年から2022年までの各年の届出において、患者の年代別分布は、60歳代以上がおよそ60%以上を占めており(2018年63.9%、2019年57.7%、2020年65.7%、2021年67.3%、2022年68.3%)、増加傾向となっています。2023年は第10週時点で、60歳代以上が占める割合は85.7%となっています(図5)。



厚生労働省は、近年において結核患者に占める高齢者の割合が3分の2以上にのぼっていることを指摘しています。結核の症状は、長引く咳、たん、微熱、体のだるさなどが挙げられますが、結核の症状としては目立たないため、特に高齢者では気づかぬうちに進行してしまうことがあります。結核を発症しても、早期に発見できれば重症化を防げるだけでなく、大切な家族や友人等への感染拡大を防ぐことができることから、早期受診・早期診断が重要となります。